

天明浅間山噴火後の鎌原村再建における、 災害復興を契機とした集落構造の変化

中谷研究室 千年村研究ゼミ・解築学ゼミ 1X20A008 筏千丸

目次構成

【序論】	
第0章	本研究について
0-1	はじめに
0-2	研究背景
0-3	研究目的
0-4	研究方法
0-5	既往研究と本研究の位置付け
	0-5-1 既往研究
	0-5-2 本研究の位置付け
【本論】	
第1章	天明三年浅間山噴火災害の概要
1-0	はじめに
1-1	浅間山および歴史上の浅間山噴火災害の概要
	1-1-1 浅間山の概要
	1-1-2 歴史上の浅間山噴火災害の概要
	1-1-3 天明三年浅間山噴火の概要
1-2	天明三年噴火による直接被害
1-3	鎌原土石なだれ・天明泥流被害
1-4	広域社会への間接的影響
1-5	小結
第2章	鎌原村の概要
2-0	はじめに
2-1	鎌原村に関する既往研究
2-2	鎌原村の地理的性格
2-3	天明三年以前の鎌原村
	2-3-1 中世のかまはら
	2-3-2 近世の鎌原村
2-4	天明三年以降の鎌原村
	2-4-1 再建された近世鎌原村
	2-4-2 近代以降の鎌原
	小結
第3章	鎌原村復興過程
3-0	はじめに
3-1	研究対象史料とその性格
	3-1-1 研究対象史料
	3-1-2 『浅間山天明噴火史料集成I~V』収録の史料
	3-1-3 『天明三年浅間山噴火資料集上下』収録の史料
3-2	鎌原村の被害実態
3-3	被災後の復興経過
	3-3-1 鎌原復興に関わった人物
	3-3-2 鎌原村復興経過
	3-3-3 復興過程の2層性
	小結
第4章	再建集落の町割り・家屋と再編家族に関する分析
4-0	はじめに
4-1	再建された町割りおよび家屋の特徴
	4-1-1 鎌原の町割りの特徴と新田開発集落との比較
	4-1-2 再建家屋と周辺遺跡の住宅遺構の比較
4-2	再編された家族の特徴
	4-2-1 家族の再編に至る経緯
	4-2-2 被災前後の居住地の変化と家族の関係
4-3	被災以降の家数および人口の変遷
4-4	小結
第5章	考察 -鎌原村復興の統合的分析と集落構造の変化-
5-0	はじめに
5-1	復興過程の2層性に関する史的考察
5-2	被災前後の集落構造の変化
5-3	鎌原村における〈復興〉および〈持続〉の再定義
5-4	小結

【結論】	
第6章	結論
	結論
	謝辞
	図版出典
	参考文献

付録： 鎌原村の集落再建に関する記録
史料の整理方法
史料編

序論

第0章 本研究について

0-2 研究背景

一連の〈千年村〉研究は主として自然災害とは縁遠い地域が対象に選ばれてきた。対して、災害多発する火山地域を対象とした伊東、碓井は通史的に地域を概観し、火山地域を特徴付ける具体的な災害被害と復興には着目しなかった。また、将来社会に展望される解体と構築を循環的に行う解築行為は歴史的には災害による破壊とそこからの再生に相当する。本研究は、**天明三年浅間山噴火後の鎌原村再建事例を対象に生存の危機に直面した時に社会集団がいかに振る舞い持続可能な生存環境を再構築したのかを主題とする。**

0-3 研究目的

上野国吾妻郡鎌原村の復興過程を集落形態と共同体の再建から分析し以下の4点を達成することを目的とする。

- 天明三年浅間山噴火災害および被災前後の鎌原村の概要を示し、**鎌原村が被災後に再建され集落が持続したことを確認する。**
- 被災直後からの鎌原村の再建経過を整理し、**鎌原村復興の全体的性質を明らかにする。**

- 再建集落の形態と再編家族の特徴を分析することにより**復興策が集落構造に及ぼした影響を明らかにする。**

- 再建復興を契機とした鎌原村の集落構造の変化を総括し、**鎌原における断絶を含んだ社会集団の持続形態を考察する。**

0-4 研究方法

萩原進『浅間山天明噴火史料集成I~V』（群馬県文化事業振興会、1985~1995）と児玉幸多・大石慎三郎・斎藤洋一『天明三年浅間山噴火資料集上・下』（東京大学出版会、1989）および鎌原村に関する絵図を対象資料とする。対象資料の史料的性格を示し、史料の有用性を確認する（【3-1】）。鎌原村の復興に関する記述を悉皆的に収集し、情報整理を行う（【付録】）。収集した記録より、被災直後からの鎌原村の再建過程について別途記述を整理し（【3-3】）、再建集落・家屋と再編家族、および集落のその後の変遷を分析する（【第4章】）。分析をもとに考察を行う。（【第5章】）

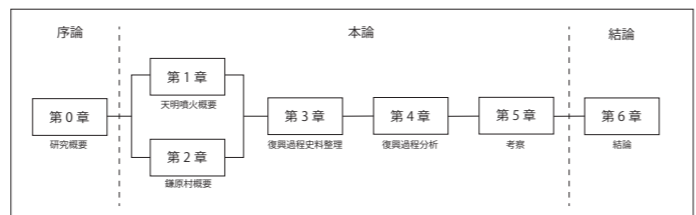


図1：論文構成

0-5 既往研究と本研究の位置付け

0-5-1 既往研究

伊藤毅『都市の空間史』（吉川弘文館、2003）

天明八年の京都大火とその後の復興を取り上げる。大都市の災害では、平時から建築の難燃化や消火体制の整備が図られたことで、短期間で復興が可能となり、火災後の町建設を通じて町並みの整備、都市拡大の舵取りが企図されたことを明らかにした。大規模災害は都市形成の重要な画期ともなり得ることを指摘している。

渡辺尚志『浅間山大噴火』（吉川弘文館、2003）

天明三年浅間山噴火以降の鎌原村再建過程を文献史学の立場から論考する。被災後の回復経過を幕末期に至るまでの長期的スパンで捉える点と鎌原の東隣に位置する芦生田村と比較して論じる点に独自性がある。農地の回復を主に分析するが、集落の再建にも触れられ、被災後に家族が再編された事実が指摘される。

0-5-2 本研究の位置付け

前近代の災害復興に関する建築史分野の研究は都市史分野の都市災害研究や文化財防災に関連した研究に限られ、集落・村落を対象とした災害復興史研究はあまりない。本研究はこれまでの千年村研究を引き継ぎ江戸時代において集落の存続のあり方を検討する。天明浅間山噴火という具体の災害に焦点を絞り、被災を経て集落の形態がどのように引き継がれ更新されたのかを論じる。**村落においても都市と同様に災害を経た変化と更新により社会集団の生存環境が維持されてきたとする仮説に基づくものである。文献史料を研究対象とし中長期スパンで災害の影響を考察した渡辺の研究手法を踏襲する。**

本論

第1章 天明三年浅間山噴火災害の概要

1-2 天明三年噴火による直接被害

天明三（1783）年四月に始まった噴火では火山灰、軽石の降下による直接の被害が南麓に集中し、七月に入り激化すると軽井沢、杓掛、追分、坂本などの宿場に多量の軽石を降らせた。

1-3 鎌原土石なだれ・天明泥流被害

七月八日午前に発生した土石なだれは、**山麓の土石を巻き込みながら流れ下り、鎌原村のほぼ全域を埋没させ北方の崖より吾妻川に流入した。**そこで大量の河川水を取り込み天明泥流と呼ばれる洪水となり、利根川に到達した。『群馬県史』では吾妻川流域から利根川合流点までの被害を計55村に流死人1624人としている。

1-4 広域社会への間接的影響

すでに耕作不順が起っていた時期に発生した噴火はさらなる天候悪化を呼び、上州で凶作と物価上昇が深刻化した。十月には罹災者が中山道筋の村々で人家に押し入ったことを発端とし、佐久地方で総勢三千人余の農民が富家や米穀商を打ち壊す天明騒動に発展した。

第2章 鎌原村の概要

2-2 鎌原村の地理的性格

本研究では浅間山頂までを含む**現大字鎌原領域北端の台地上の平坦部を鎌原集落の推定範囲とする。**中心部の標高は約910メートルである。南方の浅間山から延びる裾野末端部に位置し、集落の南側ほど標高が高い。また、埋没以前の地表土壌を特定することで天明三年以前には集落が大規模な火山災害を受けた歴史はなく、**一方で先史時代の火砕流に由来する痩せた土壌だったことを示した。**

図2：鎌原集落推定範囲と村内を貫通する街道

2-3 天明三年以前の鎌原村

中世の鎌原村は鎌原城下の集落であったとされ、**自然発生的農業集落だったと考えられる。****大戸通りと草津道の交差点に位置したため近世の鎌原村は脇街道交通の興隆にともない存在感を強め、宿場機能を持つ大規模集落を形成した。**被災時の総人口は570人程度、家数95戸から118戸、馬数200頭を数えた。一方で、耕作地面積の6割弱を下畑、下々畑に分類される低級の畑地が占め、農業生産力は低かった。

2-4 天明三年以降の鎌原村

被災後の鎌原村は93人の生存者により埋没集落の直上に再建され運営された。再建された集落は計画的開拓集落だとされる。溶岩末端の湧水を利用し鎌原用水を集落の中央に引き込み、短冊状の町割りが形成された。民間運輸量は幕末にかけ増大し、馬背運輸の駄賃稼ぎが不十分な農業生産を補った。明治期に入ると近接集落が開拓され農地開発、人口増加が見られた。**以上より、第2章では天明三年噴火は鎌原集落が受けた唯一の大規模災害であり、その被災前後に鎌原の土地で社会集団が存続していたことを確認した。**

第3章 鎌原村復興過程

本研究では、天明三年浅間山噴火に関連する史料を全国的に蒐集し翻刻、集成した『浅間山天明噴火史料集成I~V』と鎌原発掘調査に際し編纂された『天明三年浅間山噴火資料集上・下』より、鎌原村の復興活動に関する記録を収集し【付録】において史料情報を整理した。

3-2 鎌原村の被害実態

収集史料から流死者466人、村内で生活していた生存者は93人、耕地面積は87町6反5畝3歩のうち4町5反のみが残存し、**人口では8割強、土地に関してはほぼ全てが流出あるいは埋没した被災状況であり、一村が壊滅する被害を受けたことを定量的に示した。**

3-3 被災後の復興経過

収集史料から被災後1年程度の復興経過を時系列および鎌原村内の出来事と復興活動主体を明らかにして整理した。当座を凌ぐための〈応急的救援〉と戦略的に再開発を行う〈計画的復興〉という性質の異なる2つの復興活動が時間的・活動主体的に重なって存在し、被災後の集落構造に影響したとする概念規定を導入した(図3参照)。

第4章 再建集落の町割り・家屋と再編家族に関する分析

4-1 再建された町割りおよび家屋の特徴

絵図と収集史料から、埋没地の直上に列状村落が形成され均等面積に配分されたことを確認した。被災以前は屋敷地寸法のばらつきが史料に確認され、被災以前と異なる町割りが採用されたことを確かめた。武蔵野新田集落と同一形態が再建鎌原集落に見られる。これは三富新田に代表される平均割による路村型開発の標準形式が西関東一帯に普及しており〈計画的復興〉として武蔵野新田の標準路村形態が採用されたと考えられる。

しかし絵図では北方の起返耕地が地割されず現代でも不定形に分布する。これは埋没地を、全戸に量・質ともに均等に配分することが計画されたため、標準型に依らず別々の場所の耕地を組み合わせた配分を余儀なくされたと分析できる。

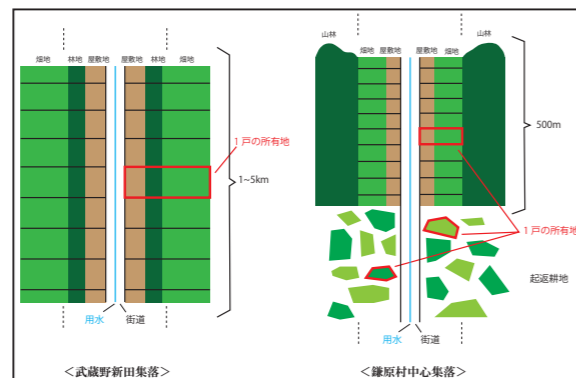


図4：武蔵野新田と鎌原の集落モデル比較

4-2 再編された家族の特徴

4-2-1 家族の再編に至る経緯

収集史料より2段階に分けて家族再編が行われたことを明らかにした。

◆第1段階〈応急的救援〉策：幕府見分以前に、小屋に集住する鎌原村の生存者全員が一族として団結するように近隣名主が説き、親族の約束をさせた。

◆第2段階〈計画的復興〉策：御救普請以降に、近隣名主が主導し生存者家族間で結婚や養子縁組を行い、40軒程度の百姓を相続させ独立させた。

第1段階は〈応急的救援〉として〈計画的復興〉措置の底流をなした。

4-2-2 被災前後の居住地の変化と家族の関係

絵図分析より被災前後で戸主名を比較した。それにより再編後の家名の8割が被災以前と変わらず、被災後の居住地の7割で被災以前と大きな変更が見られないことを明らかにした。よって家族の再編は被災以前の百姓名跡を相続することで制度的に固定され、相続された家の居住地を被災以前から引き継ぐことで集落形態として固定されたと分析できる。

4-3 被災以降の家数および人口の変遷

収集資料より天明三年から慶応四年までに2倍以上に人口が回復したが、家数は全期間で40軒弱にほぼ保たれたことを明らかにした。これより集落形態はその後の柔軟な変化を許容せず、再建された集落構造による制約が以降の鎌原村の家数と人口を規定したと考えられる。

第4章を通して〈応急的救援〉から始まった再建はその要素を残したまま、〈計画的復興〉により家族制度・土地割が組み立てられ、2層の復興活動の影響が幕末まで集落構造を規定し続けたことを明らかにした。

第5章 考察 -鎌原村復興の統合的分析と集落構造の変化-

5-1 復興過程の2層性に関する史的考察

近世後期に差し掛かった天明期は民間資本を背景にした名主層が政治経済力を強めつつ、一方で幕府の地方行政支配はまだ十分に機能していたため、〈応急的救援〉と〈計画的復興〉が復興過程にあらわれ、どちらも再建された集落構造に影響したと考えられる。

5-2 被災前後の集落構造の変化

集落構造の変化は共同体が小規模化したことと復興過程の影響により共同体が固結したこと由来する。集落規模の変化が経営動態に反映され宿場集落から交通集落へ変化した。

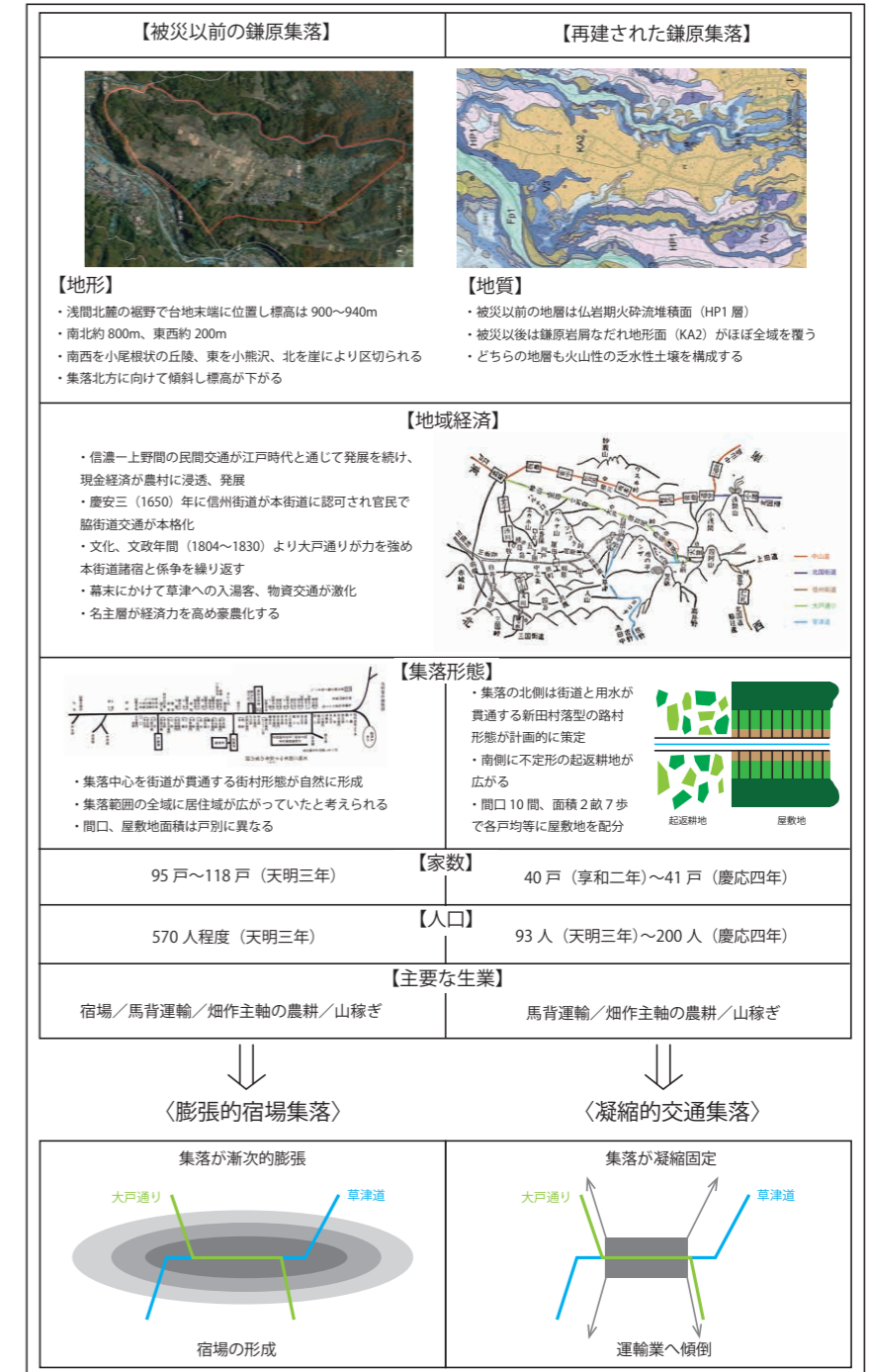


図5：被災前後の集落構造変化

出典・参考文献

図版出典
 図1：筆者作成
 図2：QGISより筆者作成
 図3、図4、図5：筆者作成

参考文献(主要なもののみ)
 ・伊藤毅：都市の空間史, 吉川弘文館, 2003
 ・渡辺尚志：浅間山大噴火, 吉川弘文館, 2003
 ・南雲栄治：浅間火山北麓における鎌原村の歴史地理学的研究, 古今書店, 1981

図3：鎌原村の復興過程整理と2層性分類